小鳥に寄せて

光本美子

☆ **小鳥が私の肩に止まる**

五月のある朝、登園してくる子どもを待っていた私は、ふっとげた箱の上に置いてある鳥籠に目が止まった。どうして今まで気がつかなかったのか不思議に思いつつ、三歳の女児と一緒に、小鳥の水とえさをかえた。〝小鳥の存在に気がつく〟ということは、何の変哲も無いことだが、妙に私の心に止まった。その日の保育が終って、なぜかしらと思いをめぐらせていると、ほのぼのとひとつの印象深いできごとが、私の心の中によみがえってきた。

それは二年前、私が幼稚園で実習をしていたころだった。私は実習後、更衣室でひとりお弁当を食べていた。するとガサガサと音がした。ドキッとして私はその音の方に目をやると……布袋から二羽の小鳥が顔を出し、見る見るうちに二羽とも袋の外に出た。「ああ」と私は驚きと恐怖の念におそわれた。（恥ずかしいことに、私はこの年になって、生き物に対し、どういう訳か恐れの気持ちがまず先に立っていたのだ）私は箸を動かすのをやめ、じっと小鳥に目をすえた。今こっちにとびかかってくるかもしれない。今のうちにそっと部屋を抜け出そうか等、臆病な私はそんなことを思いながら。すると突然、一羽の小鳥が羽ばたいたかと思うと、なんと私の肩に止まったのである。一瞬息を飲むと、次に私の髪を嘴（くちばし）でつっつき始めたのである。心臓の鼓動は極限に達し、心も体も硬直状態。ところが不思議なことに、私は肩に小鳥が動くのを感じつつ、しだいに落ち着いてきた。小鳥への恐れの念が小鳥に伝わってはいけない。もし伝わったら小鳥の方が私から逃げていく。小鳥は少しも私を恐れていない。むしろ親しみさえ覚えている。それに比べて私は……私はすっかりさっきの緊張からとき放たれた。気がついてみると、私の肩の小鳥は、もう一羽の小鳥と、かわいい声の掛け合いをしている。私の心はすっかりなごみ、とても心地よかった。この思いがけない体験をきっかけにして、私は小鳥のみならず、いろんな生き物が身近かに感じられるようになった。このように私の生き物に対する見方、感じ方（大げさに言えば世界観）を変えたできごとについて、考

えを整理してみる。

私が小鳥に対して恐れをいだいた瞬間、小鳥は私にとって、もう異なる存在相対する存在になっている。私は自分の心に壁を作り、小鳥との距離を大きく作ってしまっている。ところが小鳥は、私の思いをよそに、親しく私の肩に止まる。私との距離ははじめからゼロである。〃向うからこちらにとびこんで来てくれる〃この直截なふるまいに、私の心の壁は取り除かれたのである。この時、私は小鳥と共存する関係になっている。小鳥がいて、私がいて、小鳥と私が作る世界を共に生きている。小鳥は私を新しい次元の世界へ導いてくれた使者である。

☆　遊びで私は小鳥に出会っている

エッツの「わたしとあそんで」という絵本がある。生き物と遊ぼうとしてつかまえようとするが、みんなに逃げられてしまった女の子が、ひとりでちちくさをふきとばしたり、池にしゃがんで黙って水すましを見ていると、さっきの生き物が女の子のそばに寄ってくる。女の子はみんなと遊んでいることに気づき、とてもうれしい体験をする。このお話と私の体験とは似ている。あえて言葉にすると、心のわく、意図が取り除かれた時、動物も人間も相通ずる自然の本質（ありのままの世界）を体験することができるといえよう。

このことは保育に通ずる事柄である。実際、私は子どもとの遊びにおいて、まさに小鳥にしばしば出会っている。次の例は、二年前の保育体験だが、今もなおその時の楽しい体験を鮮明に思い出すことができる。

五歳の女児Yは、幼稚園になじめないようで、所在なさそうである。私は一緒に遊ぼうと思いながら、この時までそのチャンスを逸していた。

私はYと女児が鉄棒をするのを見る。女児たちは散らばって行く。女児Eは、私の手をとる。するとYも私のもう一方の手をとる。（はじめて、私はYを身近に感じる）三人で歩いて砂場にやってくる。私は砂を手でさわりながら、「さらさらだと高くならないわね」と言う。

E「お水かければいい」

私「そうね」

Yは黙って立ち去ってしまう。（一瞬〃やらないのかな〃と思ったが、何だかまた戻って来るような気がした）案の定Yは女児Mと砂場にやってくる。（YはMと一緒にいると心が休まるようだ）女児三人と私は、水をかけては砂を盛り、山はしだいに高くなって行く。手が泥んこになる。

Y「ぬれても洗えばいいもんね」と自

分に言いきかせるように言う。

私「そうよ、気持ちいいわ」と言う。

M「スコップ持ってくる」

Y「四つね」

穴を掘り始める。水もどんどん入る。砂や水にまみれて、遊びはしだいに力動的になる。

私「いいこと考えた。ちょっといいもの捜してくる」

私は木の枝を拾って来て山にさす。もう一度取りに行こうとすると、Mも一緒に来る。砂場に戻ってみると、さっきの木枝に、女児たちが草をつけている。

私「木に葉っぱがついた　きれい！」

男児も女児も数人砂場にやって来て、遊びに加わる。（おもしろさは他の子どもにも伝わる。）ますます活動はダイナミックになる。砂場は海のようになり、泡もいっぱいでる。

私は茶わんを持って来て泥をつめ、ひっくりかえしてその上にフワッと泡をのせる。

女児「先生何？」

私「何だと思う？」

Yたち女児三人もやり始める。私は大きなお盆を持って来る。女児らはその上に泥をひっ繰り返す。くずれてはまたやりなおす。

Y「お友だちにあげたい」と私に耳うちする。（飛躍的な発言）

私「わーそれはいい」と大喜び。

女児三人は「作りなおそう」と言って、新しく作り始める。（きっとおもしろいものができると期待して）私はその場を去る。

ただならぬ声にせかされて砂場に行ってみると、お盆いっぱいの大きなまんじゅうができている。

私「へえ　大きい」と驚き感心する。

三人は満足そうに立っている。

（Yはこの遊びを境に、実に生き生きと活動するようになった。Yの世界がパッと開けたのである）

Yがはじめて私の手をとったことは、Yと私が新しい世界に入ろうとしていることを示す。そして、Yも友だちも保育者も一緒になって、砂と水と、とにかく遊びきったその全体験の中に、すべての秘密がひそんでいる。つまり、砂、水という無意識的物質が、それに向かう人間の心（無意識の心）を呼び覚まし、力動化させる。そこで遊ぶ子どもと保育者は共に、大地的共通基盤に立って、意識を越えた生き生きとした充満の世界を体験することができるのである。

（お茶の水女子大学）